

本気で語学を

モノにしたい

あなたへ

私は日本人です。



我是日本人。

I am Japanese.

ごがくゆうしん

はじめに

タイトルに“**本気**”とあるように、本書を手にしたあなたは本気で語学を習得したいと望んでいる方だと思う。本書は正にそんなあなたのために書きまとめたものである。筆者はあなたと同じように中学1年で英語をはじめ、32歳からは独学で中国語を学び始めた。中国語を始めて4年が経った頃には、私は母国語を含む3ヶ国語を不自由なく操ることができ、インターネットをはじめとした様々なメディアを通して海外文化を享受するようになっていた。自身の経験から外国語を日本にいながらにして習得することは、決して簡単なことではないが、正しいやり方を継続すればほぼ確実に一定レベルまではいけると確信している。本書では語学の効率的な学習方法やモチベーションの保ち方だけでなく、習得後に開かれる深くすばらしい世界についても触れてある。語学は目的ではなく、世界を広げる手段であるべきだと思うからである。

本書に“本気”とつけたのには理由がある。語学の習得にはどうしても一定の時間がかかるため、継続することが不可欠なのだ。そもそも“本気”でないと継続ができない。

巷には“1ヶ月でマスターする～”や“聞いただけで～”のような語学教材が多いが、これらに興味を示す方は本書には向いていない。断言しよう。これらの簡単な方法で筆者の言う習得レベルに達することはありえない。本書が対象としている読者は、将来海外関連の仕事を志して勉学に励んでいる学生、または仕事上で外国語(英語、及び中国語)を必要とする方でプロとまでいかなくとも社内では3本指、できれば一番頼りにされる程度の外国語能力を身に付けたい方で、且つ、そのために一定の努力を惜しまない方である。

筆者は某国内メーカーに勤める一介のサラリーマンである。高校時代のアメリカへの交換留学をきっかけに異文化理解と外国語学習を志すようになり、大学で二度目の留学、卒業後は見地を広めるために通訳として世界一周の船に乗船した。その後、初めての中国出張で必要を感じ中国語を学び始めた結果、中国出張は中国語で殆ど全てをこなせるようになった。インターネットが発達した現在の世の中では、外国語が使いこなせると日本にいながらにして、海外の友達、メディア、音楽、何でも楽しめる。ネットには国境がないのだから。何も自慢するために書いているのではない。あなたもその気になれば必ずできることであり、できることで格段に広がる世界を楽しんで頂きたいのである。

本書の構成は第一章で『語学の目的』を中心に心構え、センス、資質についてまとめた。第二章に読者であるあなたが最も知りたいであろう『語学習得のテクニック』について体系的に解説を試みた。筆者の経験からほぼ確実に言えることはあなたが学ぶ言語が英語であれ中国語であれ、結局のところ人間が言語を習得する正しい方法と順序は基本的には同じということである。そのため、本書の内容を確実に学べば、あなたの学んでいる言語が別の言語であっても正しい言語習



「語学ここだけの話」

得プロセスを知る、という意味において大いに役に立つことを保証する。

語学の方法論としては普遍性を意識して書いているが、通信技術の更なる向上により、将来本書よりもさらに効率的な学習が可能になることも十分にありえる。しかし、たとえ現時点でITの進歩が止まったとしても、外国語(英語・中国語)は日本での独習が十分に可能だと断言できる。

よく No pain, no gain(苦勞なくして得るものなし)というが、これは事実である。しかし、Gain するまでずっと Pain ではないことを見落としてはいけない。Pain は絶えれば時間とともに Pleasure(快樂)に化けることを成功者の多くは知っている。本書のためにあなたが支払うお金のうちいくらかは筆者のポケットに入るが、その投資はあなたの実践次第で何百、何千倍にでもなるし、気持ち次第で紙くずになる可能性もある。当然、筆者があなたに望むのは前者である。

筆者も元来は怠け者の部類であるからわかるが、“わかっちゃいるけどめんどくさい”というあなたの心に潜む悪魔の囁きは恐らく他の皆の心の中にも存在する。この悪魔に支配されてしまうのか、或いはあなたが自らの手で悪魔を退治できるかが勝負の分かれ目になると思ってほぼ間違いない。筆者がモチベーションの保ち方に多くのページを割いたのは、語学を習得するに当たってこれがいかに重要であるかを身にしみて知っているからである。語学の習得は、何もボクシングの世界チャンピオンになるとか、オリンピックで金メダル取るとかいったこととは違う。これらは人と競争して勝者と敗者が決まってしまうので、努力すれば必ずできるとは限らない。語学は自分との戦いであるから、自分に勝てれば誰でも勝者になれるのだ。ただ、語学は簡単なことの積み重ねであるため、習得にかなりの時間がかかるのである。筆者の中国語習得の経験ではゼロからはじめて3年で自由会話のマスター、5年で高度なコミュニケーション技術の習得、といったところである。その途中で「俺はバカのひとつ覚えみたいになんかやってるんだろう」、「そもそも自分のレベルは上がっているのか」などネガティブな感情になることは少なからずあった。語学は競争相手のいないマラソンのようなもので、目標地点を設定して自分の現在地を確認しながら、途中の長い道のりを如何にしてモチベーションを保っていくか、ということが習得のカギになる。

あなたを鼓舞するために最後に言っておきたい。この本を手にする方が 100 人いるとして、この内容を着実に実践して本当の意味で語学を“習得”する人は、多くても 10 人くらいであると思う。それほどに元来人は怠け者だからである。たとえそうだとすると、筆者はこの本が残りの 90 人にとっても確実に有意義になることを約束する。今からその扉をあけるあなたが、最初の 10 人に入ることを願ってやまない。



内容

はじめに	- 1 -
第1章 語学を志す目的	- 4 -
1-1 語学のきっかけ	- 4 -
1-2 センスと資質	- 6 -
1-3 語学の目的	- 10 -
第2章 語学のテクニック	- 11 -
2-1 語学の真髄 インプット・アウトプットの法則	- 12 -
2-2 言葉を学ぶ順序（先天セットと後天セット）	- 13 -
2-3 日本語にない概念（Cゾーン）を理解する	- 17 -
2-4 文法という大事でいい加減なもの	- 20 -
2-5 先天セットの訓練方法	- 22 -
2-6 後天セットの勉強法（リーディング＋ライティング）	- 37 -
2-7 総合力の鍛え方	- 50 -
2-8 教材の選び方	- 52 -
2-9-1 目標設定と見える化	- 58 -
2-9-2 怠け者のためのタイムマネジメント	- 61 -
2-10 仮想留学という考え	- 65 -
2-11 仮想留学を実現するためのツール	- 66 -
2-12 語学の実践場所	- 71 -
終わりに	- 76 -
あとがき	78



第1章 語学を志す目的

1-1 語学のきっかけ

あなたが学習する言語が英語であれ、中国語であれ、あなたは何故、その言語を習得したいと思ったのだろうか。

- 海外旅行を現地の言葉で楽しみたいから。
- ジョニー・デップの言葉をそのまま聞き取りたいから。
- 得意ではないが、仕事で必要に迫られて。

ミーハーな動機の人から高い志を持つ人まで、様々いると思う。結論から言えば、はじめるきっかけは何でもいいと思う。おそらくJリーグで活躍する選手にサッカーを始めたきっかけを聞いたって『女にモテたかった』とか『お父さんに連れられて』というような、些細なきっかけの人ばかりで、最初から『マンチェスター・ユナイテッドに入るためにはじめた』なんて人はほとんどいないだろう。

正直に言うと、私が32歳の時、中国語を勉強しはじめたのも、些細なことがきっかけだった。2007年当時、会社で初めて中国に出張した際、出発前は得意な英語で大体は何でも通じるものだとか力をくくっていた。しかし、蓋を開けば、英語をまともにできたのは、現地の取引先会社の社長さんだけで、他の社員はできても片言レベルでしか通じなかったのである。何とか関係を良好に維持したいという思いで酒の席でも“ニーハオ”、“シェシェ”と誰でも聴いたことのあるような中国語を言っただけは愛想笑いをして、何とかすごした。しかし、コミュニケーションがまともに取れないもどかしさに私の心は終止イライラしていた。『彼らが英語をできるのを待つより、俺が中国語を覚えてやろう』と思い立ったのは帰りの飛行機の中だった。

当初から私は語学には普通に自信はあった。何故なら、中1から始めた英語の成績は常によかったし、その後、留学やボランティアの通訳などを経験し、社会人として最初に就職した23歳ですでに英検1級、TOEICも900点を越えていたからだ。但し、中国語と言う言語が英語と何の関係もないことぐらいは感覚的に分かっていたし、この聞けば聞くほど難解な言語を不自由なく操るようになれるとは到底思えなかった。語学を志すあなたなら分かると思うが、言語の習得は母国語や既に習得済の言語からの言語的近似性によって習得難易度が決まる。例えば日本語と英語は太平洋を挟むように全く違うルーツを持つ言語同士なので、日本人が英語に苦しむのは実は当たり前なのだ。逆に英語を習得してしまえば、ルーツが同じヨーロッパ言語、つまりオランダ語やスウェーデン語などは、英語をベースにして学べば習得はさほど難しくないとはいえる。因みに日本人にとって一番近い外国語は韓国語だと言われている。残念ながら中国語と日本語は漢字をはじめとす



「語学ここだけの話」

る文字文化こそ大きく日本語が恩恵を受けているが、運用言語としては全く関係がない。だから、日本人が中国語を学ぶということは既に英語を習得しているとしても、漢字の意味がほとんど分かるということ意外は、新たに外国語を学ぶ、ということとさほど変わらないのである。

さて、帰国の飛行機内で思い立った私は習得段階を大きく次の3段階に分けて考えた。

1. 発音のしかたと基本単語
2. 日常会話
3. ビジネス会話を含めた高度なコミュニケーション

先ず第1段階、まあできて 1-2年の時間をかけて2段階くらいまでいけるかなあ、ぐらいに思っていた。結局、最終的には第3段階まで行って現在に至っている。

中国語と英語にはルーツ的な共通性はないのであるが、それでも私は中国語を勉強する過程で、英語の習得過程よりもスピードが明らかに速いように感じた。これは、なんだかんだいっても英語に比べれば中国語の方が日本語に近いという理由もあるが、もっとも大きな理由は**言語を習得すること**に私がいくつかの共通するコツのようなものを見出していたからではないかと思う。実際、学習開始から4年でほとんど不自由なくできるようになったということは、英語で言えば中学1年から初めて高校1年生の終わりにはマスターしているということと同じだ。言語は若いうち程、吸収力があると考えれば、英語はもっと早くできていても全く不思議ではない。

このように書くと、あたかも私が軽々と、それこそドイツの語学の天才シュリーマンのようにスムーズに新しい言語を習得したのかと思われるかもしれない。しかし、それは絶対に違う。やはり、私も習得過程で、しんどくて、あほらしくて、やめそうになったことは何度もあったのだ。その中で自分なりの工夫をしてモチベーションを保ち、勉強を継続させる仕組みを構築したからこそ、今のレベルまで到達できたのだと思う。少なくとも留学をせずに外国語を習得した人で何となく続けてやっていて気づいたらできていた、という人は皆無だと思う。かのシュリーマンにしても相当高い“センス”があったのは間違いないと思うが、“天才”ではなかったはずだ。彼の著書『古代への情熱』からは幼少から抱いていた古代遺跡を発掘するという並々ならぬ強烈な熱意と目的意識がエンジンとなって尋常でないほどの勉強を継続的に続けた様子が生々しく伺える。正に努力に勝る天才はいないということになる。

“思い”は継続するとともに“信念”に変わる

私もささいなきっかけで中国語学習を始めたのであるが、始めたときのテンションでずっと続けたわけでは決してない。何とか勉強を継続させようとする過程で、最初の軽い“思い”は段々と強まっていき、それは“意地”になって、最後には“信念”に変わった。半分は継続するうちに自然に思いが強まったとも言えるが、もう半分は“起きた出来事”を私が意識的にエネルギーに変えたの



である。よく“コンプレックスをバネに”、という話を聞くことがあるが、あれもまた、思いをエネルギーに変える一種のテクニックだと思う。実は私は中国語を始めてもうすぐ2年という頃、自身の犯した過ちがきっかけで、それまで所属していた海外営業部を離れ、マーケティング部という新しい部署に回ることになったのである。おそらく周りから見たらいわゆる“左遷”だと思われたに違いない。ショックを受けなかったと言うと嘘になるが、私は全く腐りはしなかった。

逆におそらく自分を外す決定を下したであろう上司の上司に“今に見ていろよ”と心に発破をかけたのだった。当時、中国の市場がさらに伸びるであろうことは誰でも容易に予想ができたと思う。当然、中国語ができれば有利だということも考えれば分かることだ。しかし、本気で独学でこの複雑な言語を習得しようと腹を決めるのは容易なことではない。すでに学習から2年近くが経過していた私は、この時に、絶対にやめないこと、絶対にマスターしてやることを本気で心に誓ったのだ。

20代の頃、私も自己啓発やいわゆる成功本を多く読んだ。これらの本に書かれていることは共通項が多く、大体が正しかったと思う。つまりは、強く思えること、強く信じられることは、実現可能という単純なことである。但し、これは逆に言うと強く信じられないことは、大体不可能なのだということでもある。例えば、あなたは訓練を積みれば100mを9.8秒で走れるようになれると本気で信じられるだろうか。多分、無理だと思う。

これはあなたが陸上競技をやっていないから(たとえやっていたとしても)、臨場感をもってそれをイメージできないからである。そこに全くのリアリティが感じられなければ、先ず無理なのである。では、あなたがバリバリの陸上選手で100m 9.9秒の自己記録を持っていたとしたらどうか。おそらく調子がよい時期に自分を強くそう仕向ければイメージできる可能性が高い。そして、イメージできれば、それに向けて努力を重ね、ついには達成するのである。

私の中国語の場合、学習を始めた時点ではペラペラしゃべっているイメージは持とうとしてもなかった。現実との開きがあまりにも大きすぎたからだろう。約2年が経過して部署を移動した時もまだできてなかったと思う。ただ、この一件で猛烈に意識をした結果、3年が経つころには日常会話は7-8割レベルでできるようになっていた。

そして、この3年経過くらいの時点から、初めてイメージの中で何の不自由もなく中国語を操る自分のイメージが描けるようになっていた。それから更に1年たったころに、始めてあの時イメージした自分と実際の私を重ね合わせることができた。

あなたが外国語学習を始めたきっかけが何であってもかまわない。それを継続する過程でどうにかして先の姿を鮮明にイメージできるくらいの自信をつけてほしい。それができた時点で線路の敷設は完了、あとは線路に沿って停まらず電車を走らせるだけである。

1-2 センスと資質

よく“あの人は語学センスがある”という言い方をするが、語学にセンスの善し悪しはあるのだら



「語学ここだけの話」

うか。筆者の個人的な観点で言うと、やはり多少はあると言わざるを得ない。但し、これは学ぶ対象がサッカーや野球などのスポーツであれ、ギター、ピアノなどの音楽であれ、ほぼ何をやらせたとしても、そこにはもともと“スジ”が関係してくるというのと同じ意味においてである。幼少期を海外で過ごした帰国子女のように環境に恵まれてほぼ完全なバイリンガルになる人もいれば、中学からの学校の授業で勉強を開始して、何不自由なく外国語を操れるようになる人もいる。かといえ、大人になってから海外で5年も10年も生活しているが、せいぜい日常会話程度の語学力にしか到達しない人も大勢いるのが現実だ。統計的に言えば、やはり語学は始めるのが若い程、習得できる可能性は高いというのは事実であろう。ただ、私が中国語の学習を始めたのは 32 才の時であり、決して語学を始めるには若いとは言えない年齢であった。すでに結婚して二人の子供がおり、子育て参加や家事の分担のプレッシャーの中、決して語学学習に恵まれた環境ではなかったと思う。でも学習開始から4, 5年経過した頃には、私は中国に留学中の日本人学生や仕事で駐在しているほとんどどの日本人サラリーマンよりも流暢に中国語を操れるようになっていた。つまり、効率のよいやり方で愚直に継続して取り組めば、少なくとも海外文化を楽しむ一定のレベルまでは行けるという事実である。では、センスはできればあったほうがよいとして、それ以外に外国語を習得するにあたって必要な資質について筆者の見解を述べたい。

1. 情熱(パッション)と好奇心

外国語を習得する上で必要ないくつかの資質の中で、筆者が真っ先に挙げるのは情熱と好奇心である。これは言い換えれば“好きこそものの上手なれ”と近い意味になる。アップル社共同創業者である Steve Jobs 氏はコンピュータが好きで好きで溜まらなかったそうである。だからこそ、この世界ののめりこみ、その中に新しい夢を描き、それを次々と実現させていったのである。彼の育ての親は中卒、高卒のワーキングクラスでありながら Jobs のために一生懸命大学進学費用を捻出した。おかげで彼は希望の大学へ進学を果たしたものの、わずか半年でその大学を辞めてしまう。理由は自身の興味がわからないことに時間を費やすのがもったいないと思ったからだそう。その時点で一般人の感覚ではないのだが、逆に自身の興味のあるものに対しての集中力も同様に半端ではなかったからこそ、同業界に革命を起こせたのだと思う。彼はその後、退学した身でありながら興味がそそられたという理由だけで、Calligraphy(カリグラフィ)のクラスにお忍び参加(sneak in)し、そこで得たアイディアは、後に開発した世界初の typography (タイポグラフィ)搭載のパーソナルコンピュータ Macintosh(マッキントッシュ)として世に送り出されることとなる。全ては彼の強烈な情熱と好奇心がもとになっているといつてよいと思う。

私のような凡人を Jobs 氏になぞらえる気は毛頭ないが、私も語学に対しては一定の情熱と好奇心を有していると思う。私は読者の多くの皆様と同様に中学一年から本格的に英語の勉強を開始したが、学校でならった“My name is Yushin”, “Nice to meet you”が、初めて話す外国人(アメリカ人)に通じた時の感動が今でも心に強く残っている。通じるから、もっと知りたい、もっと知りたいか



「語学ここだけの話」

らもっと勉強したい、というように学びのサイクルが加速していったのを昨日のこのように思い出す。今となっては通じることが当たり前となり、あの時のような感動を味わうことは少なくなったが、あの感動が今日までの自分を形作っている重要な要素のひとつであることは間違いない。後に中国語を学ぶようになって、初めて本格的に中国人と対峙して、自分の中国語が通じた際も、やはり、まるでタイムスリップしたかのように同じ感動を味わうことができた。

熱心な語学の学習者であるあなたであれば分かると思うが、語学は追求すれば“語学”単体で終わることは決してない。追求すればするほど、それが当地の文化と密接に繋がっていることが分かり、その文化圏の歴史を理解しなければ、そこに生活する人の本当の実態を知ることはできないという結論に達するはずである。この探求は人が一生をかけて学べるほど深く重要かつ面白いテーマであると感じるはずだ。そして、その探求が真の意味での国際理解へとつながり、ひいては自国日本の国際化へと繋がっていくのだ。全てはあなたの情熱と好奇心が発端となるのだと思う。

2. 行動力

言語は人が作ったインタンジブルで流動的なものである。あなたがもし、数学を勉強しているのであれば、おそらく、机上の勉強を一所懸命やれば一定レベルまで到達できるように思う。だが、外国語を習得しようと決意した場合、特に自国にいながらにしてネイティブに認められるほどの語学力を養いたいと思う場合、“行動力”があることは重要な要素である。行動力とは目的を達成するための手段をあらゆる角度から考案し、それを実行する力のことである。恐縮であるが自身の経験を引き合いに出して、解説したい。

大学でアメリカへの留学を終えて帰国した私は、すでに高レベルの英語力を身に付けていたにも関わらず、全くもって自身の口語コミュニケーション能力に満足していなかった。大学卒業までまだ半年以上あるなかで、どうにかしてライバルを寄せ付けないくらいの満足いくレベルの英語力を身に付けたいと思っていた。時は 1998 年、日本でもインターネットが徐々に普及し始めた時代である。当時、名古屋に在住していた私は、スカイパーフェクトTVで米国の FOX NEWS や DISCOVERY CHANNEL を四六時中付けっぱなしで見る傍ら、どうにかしてスピーキング能力をぶっちょりに高められないかと考えていた。そこで思いついたのがカリフォルニアのピザ宅配だった。当時、インターネットを通じていろいろな情報が手に入る中で、カリフォルニアのピザ屋に電話をかけてピザをオーダーすることを思いついたのだ。まず、インターネット上のホームページから電話番号を書き記す。そして、どのサイズのピザに何のトッピングを乗せるかをある程度決めた上で国際電話をかけるのだ。“Hi, XXX pizza, may I help you? (いらっしやいませ xxx ピザです)” おそらくバイトで雇われているであろうカリフォルニアの兄ちゃんが電話にでる。“Yes, I would like to order a pizza for delivery (ピザのデリバリーお願いします)” というと、兄ちゃんはピザの種類やトッピングを聞いていく。最初は早口に慣れずに色々聞き返すのだが、それも段段に慣れてくる。如何しても分からな



「語学ここだけの話」

ければ“Sorry（ごめんなさい）”と言って切ってしまえばよい。試行錯誤の末、ピザの生地やトッピングを全て伝えて、兄ちゃんが配達住所を聞いてくるときである。すかさず“Can you Fedex to Japan?（日本に Fedex してくれない？）”と言えれば成功である。相手はカリフォルニアのバイトの兄ちゃんである。ほとんどの場合、ジョークの許容範囲内として、笑って許してくれた。

もちろん、ここで皆さんにいたずら電話を奨励しているのでは決してない。語学に本気で取り組もうと思った場合、好奇心と創造力（クリエイティビティ）を存分に働かせれば、ネイティブスピーカーに接点を持つための行動力が生まれることを訴えたいのだ。カリフォルニアのピザ屋はほんの一例に過ぎないが、目的を明確にして本気で手段を考えればいくらでも方法は見つかるはずである。

3. 継続できること

語学を習得する要素として最後に“継続”をもってきたが、最初の情熱と好奇心に劣らず重要な要素のひとつであると認識している。語学の習得は決して短距離走ではなくマラソンのような長距離走である。私は外国語を習得するということは簡単なことではないと思うが、難しいことでは決してないとも思っている。“簡単なことの延々たる反復と継続”という表現が一番ぴったりくる。もし、語学が難しいとしたら、それは大して面白くもない比較的簡単なことを、脳に刻み込まれるまで延々と繰り返すためのモチベーションを継続させることである。語学は一週間とか一ヶ月とかの期間集中して取り組めば習得できるものではない。こつこつと地味な作業を一ヶ月、3ヶ月、半年、一年とやるうちに段々と実力が伸びていくものである。成果がすぐに見えないからといって一ヶ月とかでやめてしまうひとは語学の習得には向かないと言ってよいだろう。後述するが、継続するためのテクニックも必要である。要は昨日より今日、今日より明日の方が上達していることを実感する仕組みをつくるのが大事である。



「語学ここだけの話」

1-3 語学の目的

語学を始めたきっかけは人それぞれあるものの、その究極の目的とは何だろうか。私はあなたが外国語教室の先生にでもならない限り、あなたにとって外国語そのものが目的になることはないと思う。よく言われるように、外国語は英語も中国語も基本的には日本語と同じコミュニケーションツールのひとつに過ぎないのである。それは、意思疎通の“手段”であって“目的”ではないのだ。例えば、あなたが必死で勉強を続け、ようやく英語をマスターしたとする。あなたはアメリカ人の友人と電話で流暢に冗談話に花を咲かせ、ゲラゲラと笑っている。果たしてあなたは気分がいいだろうか？私の答えは逆をついて、『YES, OF COURSE, 気持ちいい』である。それは長年苦労を重ねた結果、やっと海の向こうにいる人間と（しかも周りの人がほとんど分からない言語で）コミュニケーションがとれるようになったのである。そんなもん、快感に決まっている。しかし、この中身の薄いバカ話をするだけでは、これから始まる世界の『入り口に立った』とは言えても、『醍醐味を味わった』とは到底言えないのである。外国語を習得して言葉が通じた時の快感は私もよく分かる。私も一時的に半分それが目的になってしまうことすらあった。しかし、外国語を日常的に使用するにつれ、その快感は段々薄れていき、最後には当たり前になっていく。これはあなたが意思伝達の手段としての外国語をマスターした証拠である。

私は外国語をマスターする本当の目的はそこからやっとはじまるのだと思っている。外国語を習得したということは、当地の文化や歴史を含めたありとあらゆる情報にアクセスする手段を確立したということなのである。外国語を通して手にすることができる情報の中には、日本語や日本の価値観では測れないものが多く存在する。この媒体を通して入ってくる情報を自身の文化フィルターに通してろ過してみるとよい。ろ過されて出てきたものが異文化圏からもたらされる本当のインテリジェンスなのである。このインテリジェンスはあなたの視野を広げ、同時にあなた自身の人間の幅も広げてくれる。あなたのレベルが高まれば、結果的にあなたの国のレベルも高まるのである。私は語学の習得の究極の目的はここにあるのだと思っている。



「語学ここだけの話」

第2章 語学のテクニック

本章よりいよいよ語学習得のテクニックについて解説したい。本章での解説は英語や中国語に限らず、全ての外国語学習に適用できる普遍性を意識して書いてある。私が見る限り日本での学習者の多くは語学に対してのアプローチを間違えて認識しているか、間違っているのをうすうす気づきながらも延々と同じ方法で勉強を続けている様である。そのため、本章の前半では語学というものの理論を中心にまとめ、読者に改めて正しいアプローチを再確認して頂こうと試みた。後半では語学習得で大事だと述べたモチベーションの保ち方について、そして私自身がどのようにして語学を道具として活用しながら学びを続けているかについて、いわば語学の実践編としてまとめてみた。一度で理解しなくても、何度も読み返して納得いただきたい

2-1 語学の真髄 インプット・アウトプットの法則

長年、語学というものに携わるなかで、最も大事なことは何かと考えてみた。文法？単語力？リスニング力？どれも大切であることは間違いないが、私は語学の真髄は何かと聞かれた場合『インプット・アウトプットの法則』ということにしている。これは、良質のインプット(リスニング＋リーディング)があって初めて良質のアウトプット(スピーキング＋ライティング)が可能になるという考えである。あなたが今、日本語をしゃべっている(アウトプット)のは生まれて母親をはじめ周りの人の日本語を聞き続けた(インプットし続けた)からである。あなたのしゃべる日本語は、間違いなくあなたがこれまで聞いた日本語が元になっている。その証拠に九州で生まれ育てば九州弁をしゃべるし、大阪で育てば大体関西弁をしゃべるようになる。標準語をしゃべる父親と母親に育てられた赤ん坊の第一声が『おかん、ミルクほしいねん』ということは普通ありえないのである。

これを外国語学習にあてはめるとどうなるだろうか。外国語で言うインプットとはリスニングとリーディングであり、アウトプットとはスピーキングとライティングになる。つまり、上手に話したり書いたりすることができるようになるためには、良質の外国語を聞き取り、良質の外国語を読むことが必須条件になる。コンピュータの世界で GIGO (ガイゴ)という言葉があるのを知っているだろうか。これは“Garbage in, Garbage out (ゴミを入れたらゴミが出る)”の略でコンピュータと言えど、入力するものがダメだったらダメな出力しか期待できないという意味だそう。言葉を覚えるときの人間の脳もコンピュータと同じで、全て input から始まり、それが output に反映されるのである。私はこれを勝手に『インプット・アウトプットの法則』と名づけている。本書で何度も出てくる語学の基本中の基本なので、覚えて頂きたい。この法則を聞いて今の時点で“ピン”とこなくてもよいと思う。しかし、あなたの学習する言語が何語であるかに関わらず、継続して学習して習得レベルに達したときに、振り返ると結局この原則に行き着くと思う。因みにこの『インプット・アウトプットの法則』は言葉だけに留まらず、音楽などの芸術にも当てはめることができる。標準語ばかりを聞いて育つ赤ん坊が関西弁を話さないのと同様に、クラシック音楽ばかりを聞いて育った音楽家がいきなりロックミュージックを作曲することもないのである。そして、言語も音楽もインプットの量が臨界点に達した後に溢れる様にしてアウトプットが始まるのである。

2-2 言葉を学ぶ順序（先天セットと後天セット）

あなたは言葉を覚えるには順序があるということを意識しているだろうか？ご存知の通りどんな言語もリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの4要素で構成されている（※世界には 6000-8000 の言語があると言われていたが、読み書きを含めた4要素を含むのは 400 前後である）。インプット・アウトプットの法則を理解したあなたなら分かると思うが、これらの4つの構成要素は順不同で学んでよいわけではない。ちゃんと学ぶ順序が決まっているのである。その順序は基本的には赤ん坊を参考にしてよいと思う。赤ん坊は母親のしゃべる言葉を聞いて脳に蓄積していく（リスニング）。1年、2年と母親の言葉が蓄積されて、初めて言葉らしいものをしゃべり出す（スピーキング）。その後、3歳～5歳くらいで教育を受けられる恵まれた環境にある人はリーディング、ライティング（読み、書き）を覚えはじめる。通常5歳くらいになるまでには日常的に話される内容の言葉を聴いて理解し、口頭で意思を表現する能力がついている。このリスニングとスピーキングの能力は言語の基本であり、リーディングやライティングは後天的な学習によって初めて可能になる応用レベルの能力である。本章で語学のテクニックを説明するにあたり便宜的にリスニングとスピーキングを『先天セット』、リーディングとライティングを『後天セット』と称して分けて説明を試みたい。アメリカでも中国でも母国語を話せないと言う人はほとんど皆無に近いが、読み書きができない人は未だ多いように、これら二つの能力は本来分けて考えるべきなのだ。リーディング、ライティングという能力は高等動物でも人間にしか与えられてない能力であり、これらはリスニングとスピーキングの能力が一定レベルまで到達して初めて学ぶべき高等技術なのである。つまり、赤ん坊が言葉を学ぶ順序は

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| 1. リスニング(input) | |
| 2. スピーキング(output) | 先天セット（人間にもともと備えられた能力） |
| 3. リーディング(input) | |
| 4. ライティング(output) | 後天セット（学習して覚える能力） |

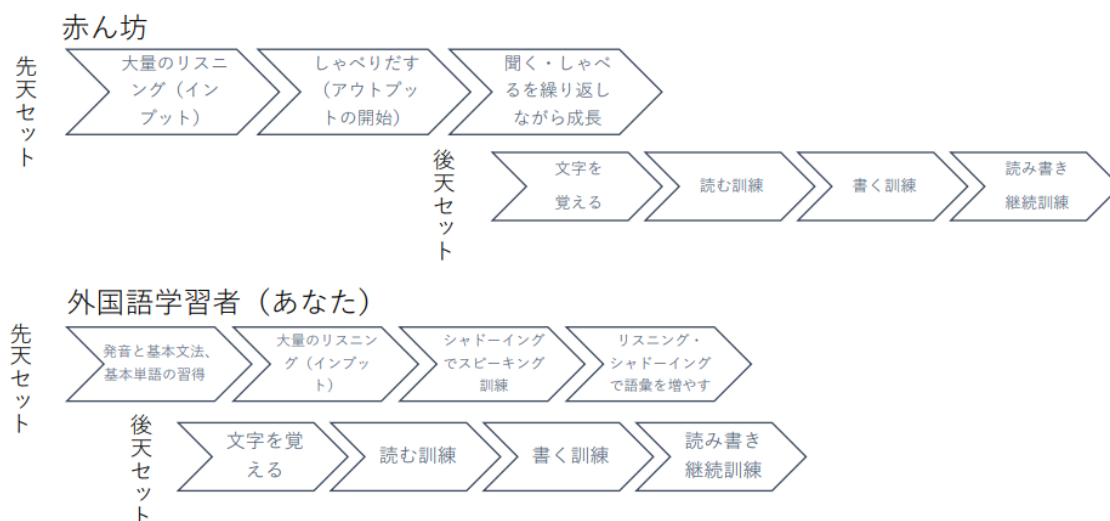
ということになる。あなたが外国語を学ぶときも、基本的には同じ順序で学ぶべきなのである。言うまでもなく日本の学校での外国語教育は後天セット（リーディング＋ライティング）に重きが置かれすぎており、先天セット（リスニング＋スピーキング）に十分なウェイトが置かれてない。これは**基本を飛ばして応用をやるようなもの**であり、結果、中学、高校と実に6年の時間をかけて勉強しても日常会話も満足にできないという深刻な状況が当たり前のように放置されている。あなたの目的が中間テストや期末テストをパスすることであれば、何も言うつもりはないが、将来的に外国語を



「語学ここだけの話」

実用言語として使おうと考えているのであれば、学校の教育課程とは別に足りない部分を補う学習を自分で行うことをお勧めする。きちんとやれば、高校卒業時には少なくとも通常の日常会話などは全く問題なく話せるようになっているはずである。

さて、赤ん坊の言語の習得順序を見てきたが、残念ながらあなたは赤ん坊ではない。従って赤ん坊と全く同じように外国語を学ぶことは難しい。では、赤ん坊とあなたでは何が違うのだろうか。違いはたったの一つで、赤ん坊の頭は真っ白なのに対しあなたの頭には既に母国語がインストールされているということである。これはパソコンのOSに例えると分かりやすい。赤ん坊はOSの入っていないパソコンだから第一言語をそのままインストールすることが可能なのに対して、あなたの場合は母国語(日本語)というOSが既にインストールされているため、別の言語をいれようとする時、既存のOSが邪魔をするのである。かといって、既存OSを通さずに外国語を理解しようとしても、それは非常に難しい。外国語学習者の場合は、最低限の基本文法や単語を既存OS(母国語)を通して学んだ後、大量のインプットにより徐々に独立した外国語OSにしていくことが理想的なのである。これは言うのは簡単であるが、実際には現在の外国語教育のやり方を根本な部分から変えることになるので容易なことではない。下に、赤ん坊の言語習得過程とあなたの外国語習得過程(理想)を並列で流れのグラフに表したのでよくご理解頂きたい。



あなたはまず、外国語の発音を耳から覚え、実際に発音できるようになるまで練習することから始めるべきである。良質のインプットが良質のアウトプットを生むのであるから、耳から覚える際はネ



イティブスピーカーのオーディオメディアから耳に入れることが望ましい。十分に発音ができるようになった時点で、基本の単語と文法を覚える。文法は言語の構造を体系的に説明したものであるから、どうしても母国語(日本語)でないと理解しにくい。但し、次項で詳しく説明するが、この文法はある程度いい加減に 7-8 割程度覚えるくらいの感覚でよい。何故なら、語学の最終段階では文法というものを考えずに自然と自分の意思を外国語で表現できることが理想であるからだ。基本文法を覚えたら、あとは正しい音声教材を使って大量にリスニングすると同時に、同じように口から出せるようにスピーキングの練習も大量に行うとよい(最も効果的な『シャドーイング』という方法については後に詳しく説明する)。この、正しい発音の仕方と大量リスニング+大量スピーキングの部分が日本の学校教育ではすっぱり抜けていて、多くの先生方も実はできていないのが現状である。大量リスニング+大量スピーキングは、一定レベルまでいけばやめてよいわけではない。習得するまで、そして習得してからもずっと続けるべきである。あなたも母国語である日本語を聞き続けているし、しゃべり続けているだろう。それと同じである。当然、最初はスピードについていけなかったり、分からない単語が多すぎたりして“苦”に感じることもあると思う。しかし、続けていれば確実にあなたの脳内に外国語回路が構築されていき、習得段階ではそのまま理解できるようになり、聞くこと自体が楽しくなっているはずである。

これと平行して学校教育でおなじみの後天セットを覚えていけばいい。先述したとおり、先天セットが基礎で後天セットは応用である。これらの能力も勉強すればできるというものではなく、結局のところ最後にモノをいうのは量である。日本語でも多く本を読む人とそうでない人を比べれば、ほぼ確実に前者のほうがリーディング及びライティング能力が高いはずである。外国語のリーディングとライティングの習得も大量に良質のものを読み、それを書き出す訓練をすることに尽きる。リスニングもリーディングも大量に行ってそれが脳内で臨界点に達して初めてスピーキングやライティングに正しく反映されていくのである。こう言うと、『聞いて分からないものは何回聞いてもわからない』し、『読んで意味がわからないものは何回読んでも分からない』という人がいると思う。その通りである。意味が分からないまま闇雲に聞いても読んでも実は効果は上らず、かえって苦痛である。『聞くだけで・・・できる』などの教材が効果をもたらすには条件があるのである。3 回聞いて分からない単語が4回目に分かるということは殆どないと考えてよいと思う。どうすればよいかについては 2-5 でじっくり見ていくことにしよう。

ここまで説明した『インプット・アウトプットの法則』と言葉を学ぶ順序は今後学習を進めていく上で非常に大事な基本概念である。それは学習しているのが英語でも中国語でもアラビア語でも正しいアプローチは全く同じだと考えてよい。理解を深めて頂くために、おさらいとして下記をもう一度だけ声に出して読んでほしい。



「語学ここだけの話」

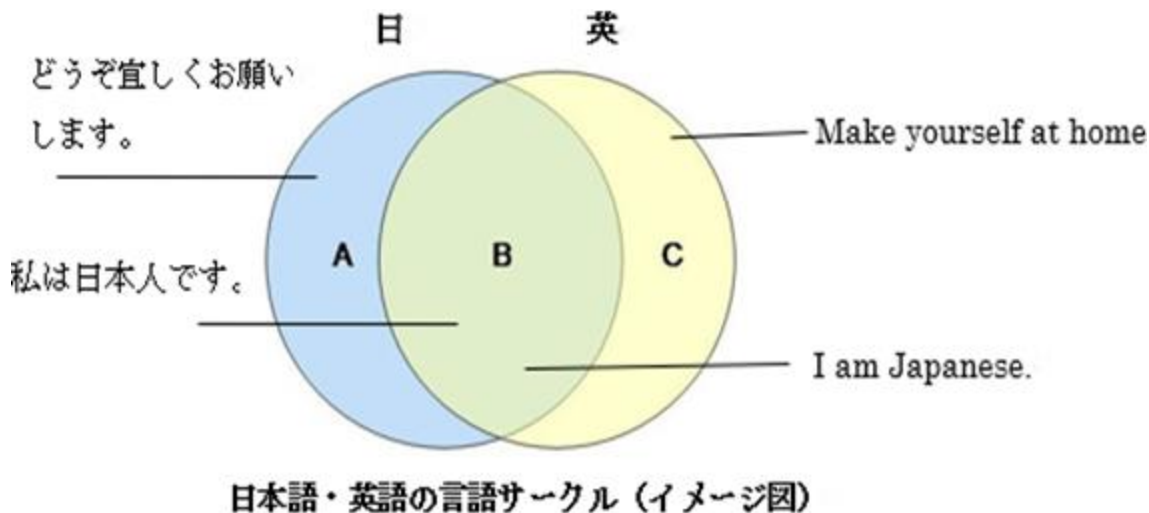
- 言語の習得は音声のリスニングから始まり、そのリスニングがスピーキングに反映される。
- 読み書きの能力は応用技術であり、基本である「聞く・話す」の後に学ぶものである。
- あなたはたくさん聞いて初めてしゃべれるようになる。
- あなたはたくさん読んで初めて書けるようになる。

あなたが中学高校で6年間勉強しても“しゃべれるようにならない”のは至極当たり前である。必死で受験勉強をしたあなたは読んでばかりいたのではないか？6年間で合計何時間の英語(中国語)を聞いただろうか？それが分かれば答えは自明である。この大きな矛盾に気づいたあなたは絶対に今からでも遅くない。本書をしっかりと読んで学習法を改善してほしい。本書で紹介する習得方法はあくまで『外国語そのものを文化ごと脳にインストールする』とイメージして頂きたい。難しく聞こえるかも知れないが、継続してやれば必ずできることである。ここでは、語学学習の正しい順序と『大量インプットが全ての土台になる』ことのみ、最低限理解した上で、次の章にすすんでほしい。



2-3 日本語にない概念（Cゾーン）を理解する

私は語学に携わる中で外国人や帰国子女の友人、又は日本で英語を勉強する学習者の皆様と接する機会が多くある。帰国子女とは通常、親の仕事の関係などで幼少期を外国で過ごし、自然に2つの言語を習得した人たちのことを言う。一方で英語圏に留学するわけでもなく、全て日本で勉強し英語をマスターされた方も多くいらっしゃる。私は彼らのしゃべる英語を聞き比べていて気づくことがある。例えば発音に関しては、幼少期を当地で過ごした帰国子女の方が国内学習者に比べて大体はきれいな発音でしゃべることができる。国内学習者の練習不足もあるかもしれないが、ある程度はしょうがないだろう。しかし、多くの場合、この発音やイントネーション以外にも確かに違うところがあるのである。それは一言で言うと“発想”や“表現”ということになる。例えば、あなたが日本で英語を長年学習して、日本語で言えることはほぼ全て英語で言えるようになったとする。この状態は、自分の考えを英語で表現することができることになったということではあるが、“真のバイリンガル”にはなってない場合が多い。何故なら、この時あなたは常に日本語で発想して、それを英語で表現しているだけだからである。下の日英の言語サークル(イメージ図)をご覧ください。これは日本語と英語の発想や表現の領域をイメージ図で表したものである。



例えば、『私は日本人です』は“I am Japanese”と訳することができ、ほぼ同じ意味と言えるだろう（但し、ここの Japanese は形容詞扱いである）。ほぼ同じ意味になるのはこの文に**文化的な要素がほぼ含まれていない**からである。イメージ図でいうところのBに属する部分だ。では次の場合はどうだろう。

『私は山田と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。』



この文は厳密に言えば 100%同じ意味の英語にするのは不可能である。なぜなら『申します』とは謙譲表現であり、英語にこれに相当する表現がないからだ。また『宜しくお願いします』が意味するところも、一字一句を訳しても通じず、せいぜい“How do you do?”とか “Nice to meet you”と置き換えるのが無難なところである。その他、「お疲れ様です」、「いただきます」、「失礼します」等の日常的な表現はいずれも A ゾーンに属する表現であり、100%同意義の英語にすることは不可能なのである。では、逆に英語から日本語に訳す場合を考えてみよう。同じように “I am Japanese” は文化的要素がないから『私は日本人です』でよいが、

“Please, come in. Make yourself at home.”

はどうだろう。『どうぞ、入ってください。自分の家と同じようにくつろいでください』ということになると思うが、しっくりこないだろう。『そもそも日本語ではそんな風に言わない』という印象をもつと思う。つまりこの表現は英語的な文化要素を含むイメージ図のCに属するのである。英語では日常的に使われる“I miss you”、や某シューズの大企業のスローガン”Just do it”なども、しっくりくる日本語に訳せない C ゾーンとすることができる。

実際はこの図のように A, B, C の三種類にくっきり分かれるわけではないのだが、ある文化圏の言語から別の文化圏の言語に橋渡しする場合、一筋縄にはいかないのを理解して頂けたかと思う。二つの言語が属する文化圏がお互い離れていれば離れているほどAとCのゾーンは大きくなり、その分、真の意味でその外国語を習得するのは難しくなる。実際にプロの通訳や翻訳家はその場で臨機応変に近い表現を使用したり、うまくごまかしてスムーズな橋渡しを実現しているのだと思う。

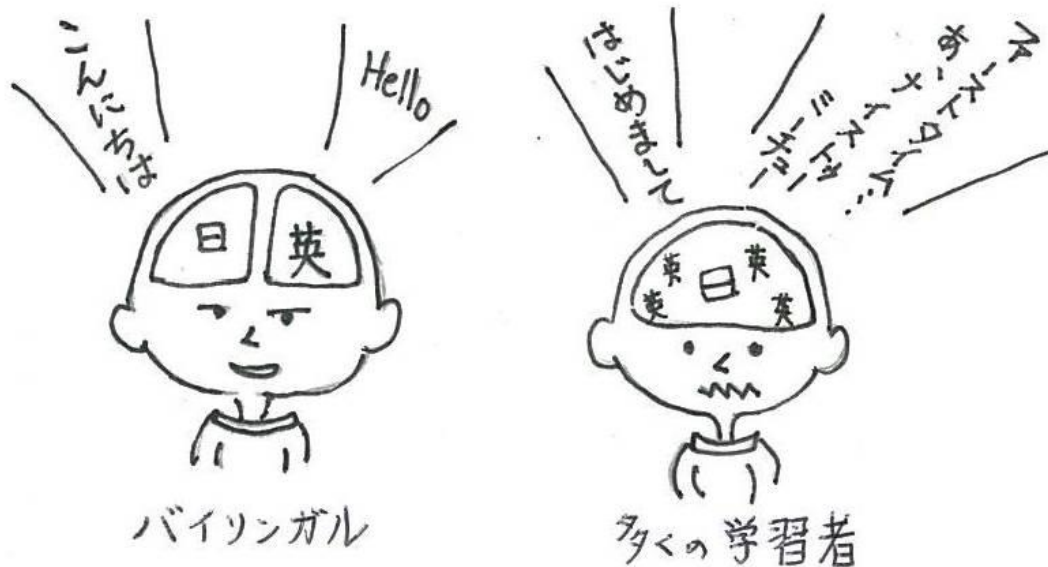
さて、冒頭で引き合いにだした日本の学習者に多く見られる欠点は、A と B はマスターしたが、C の部分が抜け落ちている可能性が高いということである。このCの部分は、今後語学習得のテクニックを説明する上で頻繁に引き合いにだすことなので**言語サークルの『Cゾーン』**と名づけよう。Cゾーンは日本語文化圏に存在しない概念で、それ故日本語にうまく分解できない。この学習者の頭にCゾーンが入っていない理由は簡単で『常に日本語で発想している』からである。日本語で発想しているかぎり、AとBに属する言葉や表現しか出てこないのだ。逆に言えば日本語を勉強するアメリカ人であれば日本の文化的な要素が入る A ゾーンが抜け落ちる可能性が高い。

帰国子女の場合は A, B, C が満遍なく脳にインストールされている場合が多い。だから両方の文化圏での発想ができるし理解できるということになる。実は私は帰国子女ではないが、確かに日本語と英語のソフトは別々にインストールされていると感じる。英語でしゃべる時に明らかに日本語では言わない(言えない)であろうことをしゃべっていると感じるのが頻繁にあるのだ。この感覚はまるで自分が二重人格になった様な感じがして気味が悪かったが、その正体は言語ソフトが別々に存在しているということなのだと思う。逆に言えば、帰国子女でなくても、正しいやり方を行



「語学ここだけの話」

えば、いわゆる英語脳をインストールすることは可能ということである。あなたが真のバイリンガルになりたいのであれば、学習者の盲点であるCゾーンの存在を意識しないといけない。その習得方法はこれから説明するが、ここまで説明した“インプット・アウトプットの法則”と“Cゾーン”という概念をもう一度読み直して理解してから読み進めて頂きたい。



2-4 文法という大事でいい加減なもの

一定年齢に達した人が日本で外国語を学び始める場合、最低限の文法知識は必要だと思う。しかし、前章で触れた通り、**文法を元に言語ができたのではなく、言語があってそれをできるだけ分解したのが文法**なのである。この事実にも異論を唱える人はいないと思うが、依然として外国語教育現場では『この文の“waiting”は動名詞なのか分詞なのか』、といった不毛な議論を戦わせ、これこそが外国語の勉強なのだと信じる“学者様”がいるようだ。賢いあなたは間違ってもこのような議論に参加してはいけない。結論を言えば、『そんなのどっちでもよい』のだ。あなたが目指しているのは、その言語を操るコミュニケーターであって、学者ではないはずだ。

逆にあなたは日本語文法の“が”と“は”をどうやって使い分けるかを例外なく説明できるだろうか。たとえできたとしても、そんな難しいルールを外国人学習者が覚えられるだろうか。

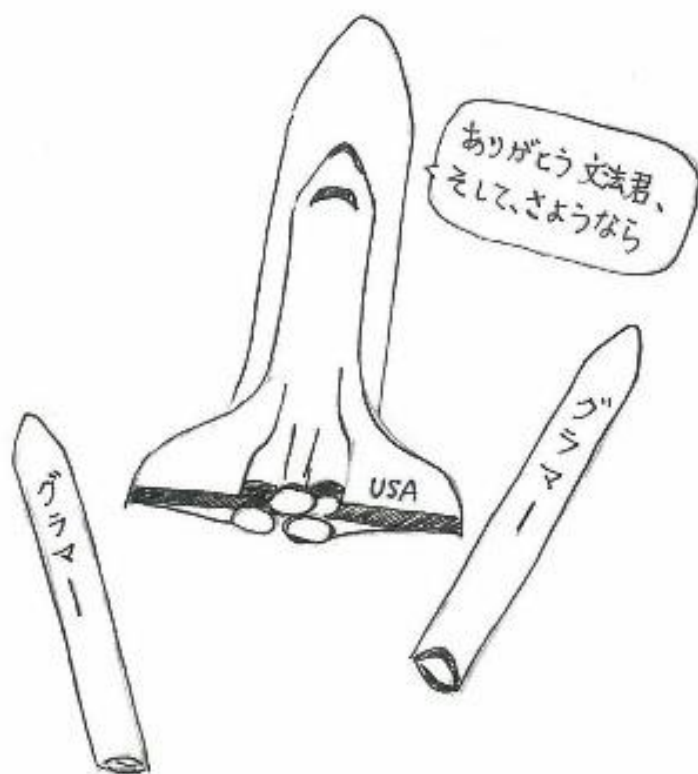
もう一度だけ言おう。文法とは、それが英語であれ中国語であれ、『人がしゃべったり書いたりする“アナログ”且つ“いい加減”な言語というものを、なるべく体系的に説明しようと“試みた”もの』である。この解釈が正しい。だから、大事ではあるが、これを100%理解することはできないし、理解する必要もないのである。そして、あなたがこの言語を習得した時点で口から出る言葉は、『思考から直接言語に分解されて出てくる』のが理想であるし、それは可能である。当然、その段階では、あなたの脳みそから“文法”という骨格はほとんど溶けてなくなっていないといけないのである。

皆さんも英語を習い始めたときに be 動詞の変化について覚えたと思う。be 動詞は主語によって I のときは am, you のときは are, this のときは is のように形が変化する。決して“I is a boy”とはならないのである。なぜか・・・？と悩んだあなたはすでに“学者路線”を歩き始めている。理由なんかないし、あったとしてもどこのアメリカ人もそんなことは考えてない。理由があるとすれば、『皆そうしゃべっているから』ということだけである。文法は“完成されてない型”のようなものだから、その型を何回も練習して自然に口からでるようにするのが正しい覚え方である。野球でも正しいバットを振るフォームがあると思う。あのフォームをいくら理論で説明しても身につくことはない。何度も何度も素振りをしながらコーチに修正してもらい、最終的に体で覚えさせるのだ。文法も同じように考えよう。『なぜ？』を考える時間があつたら下記を口に出して10回でも100回でも発音した方がよい。

I am a boy. I am a boy. I am a boy. I am a boy. I am a boy. I am a boy....
You are a girl. You are a girl. You are a girl. You are a girl. You are a girl....
This is a pen. This is a pen. This is a pen. This is a pen. This is a pen....

これはあなたが日本語をしゃべる時に日本語の文法を考えることがないのと同じだ。私は正しく英語と中国語を習得したから、これらをしゃべる時も文法というものはほとんど意識することはなく、それぞれの言葉で直接意思を表現している。

初期の学習者に誤解されないように補足しておこう。“文法”は初期学習段階では非常に大事である。懸命に勉強されたい。文法は正に木の幹であり、建物の土台である。この木の幹があって、初めて単語やイディオムといった枝葉をつけることが可能になる。但し、この文法はもともと“不完全”なものであるから、完全に理解しようとしなくてよいということを言いたいのだ。理系のあなたは特に注意されたい。そして、ほとんどの枝葉が完全についた段階で木の幹の大部分は地中に埋まって見えない状態になるのが理想なのである。それは、これから説明する大量のインプットとアウトプットによりのみ可能になるのだ。今はもうなくなってしまったスペースシャトルが、打ち上げから大気圏を出る直前に鮮やかに燃料タンクを切り離したように、あなたも段階的に文法という燃料タンクの切り離しをされたい。



2-5 先天セットの訓練方法

ここからはあなたが基本的な文法を理解したという前提で実際に語学を身につけるための具体的な理論とテクニックを紹介するが、中でも先天セット(リスニング＋スピーキング)に重きを置いて説明したい。その理由の一つは言語の基本は先天セットであり後天セットはその応用であるからということ。先天セットの中でもリスニングはその大元の部分である。もう一つの理由は日本の語学教育では明らかに、この基本をほとんど飛ばして、後天セットから入るという非効率をずっと続けているからである。もし読者の中に中学、高校の英語教師がいるなら、おそらく、ご自身でもそのことに薄々気づいているはずである。今からでも遅くないから、こっそりやり直した方がよい。でないと、後に優秀な教え子から笑われる可能性が高い。

MP3 playerを手放すな(ウォークマン等の携帯型音声プレーヤー。スマホは△)

現代の外国語学習においてスマホは絶対的に必要な”語学の神器”と言っても過言ではない。しかし、ここではあえてスマホではなく語学用に別途 MP3 player を持つことを強く推奨しておく。なぜならスマホはその便利さ故に他のエンタメ(Youtube 等)への誘惑が強すぎるからである。繰り返すが**リスニング能力は全ての語学の根幹**である。全ての人間はスピーキングでもライティングでもリーディングでもなく、リスニングという音のインプットから言語能力を発達させていく。語学学習者はこれを深く理解し、それに従った学習方法をした方がよい。**一般的な語学学習者はリスニングの絶対量が足りてない**ように思う。リスニングで音から覚える単語やイディオムを頭に浸透させるには時間がかかる。一回や二回ではなく、何度も聞いてそれを自分が発音できるようにならなければ、その言葉が本当に頭に“インストール”されたことにはならない。“Walk”という単語を見て、『歩く』と分かる程度の認識では、習得したことにはならないのである。何度も聞くには、どうしても手軽に正しいネイティブの発音を聞ける状態をつくらねばならず、それを実現するには常にウォークマンなどの手軽に携帯できる MP3 player を所有することが必須である。詳しくは 2-10 の『仮想留学という考え』を参照されたい。

発音とイントネーション

語学、特に英語や中国語を習得する上において、発音・イントネーションを軽視してはいけない。もう一度言おう。発音・イントネーションを軽視するでない。熱心な学習者であれば、これを聞くのは初めてではないはずだ。しかし、そのうちどれだけの人が本当に発音・イントネーションのトレーニングを継続して行っているかはなはだ疑問だ。少なくとも中学から始まる学校での英語教育においては発音のトレーニングは皆無といってもよい。ご存知だとは思いますが、国際社会において日本人の英語に対する評価は残念なほど低い。これはドイツ人やスウェーデン人など母国語が英語と同じルーツをもつ国の人々と比較しているのでは、しょうがないとも思えるが、実は韓国人や



「語学ここだけの話」

中国人と比べてもやはり劣るといわざるを得ない。これには様々な理由があると思うが、やはり、日本人の“発音・イントネーション”がノンネイティブとして“聞くに耐える”レベルに到達していないことが理由のひとつにあると思う。この問題についての解説と具体的な解決方法を提示したい。

そもそも何故日本人の発音はよろしくないのか。理由はたったの二つである。ひとつは、日本語という言葉が必要とする発声音(発音)の領域が、他の外国語(ここでは英語、中国語)に比べ非常に狭いということ、もうひとつは単なる練習の不足である。私達が話す日本語は“あいうえお”から始まり“ん”で終わる50音のほかに濁音や半濁音などを含めた比較的少ない種類の発音で構成されている。このため、日本語を学ぶ外国人は日本語の文法こそ複雑で難解な印象をもつ人が多いが、日本語の発音が難しいという人はあまりいない。これに対し、日本人が外国語(英語、中国語)をしゃべる際は、日本語には全く存在しない発音・イントネーションが多く頻繁にでてくる。中国語の場合はこれに加えて四声と呼ばれる声調が加わるので日本で育った我々からすれば難解なことこの上ない。我々はこれらを無理やり“カタカナ”で表そうとするが、これは語学学習上、絶対にやってはいけない過ちである。英語や中国語の発音をカタカナで表現しようとするのは白と黒の強弱で色を表現するようなもので、所詮不可能なのである。例えば、学習初心者でも分かる、下記のような語句でも決してカタカナにできない。

『お母さん、喉が乾いた』

“Mom, I'm thirsty.” (マム、アイムサースティ)

『妈，口渴了。』(wo3 kou3ke3 le) (マー、ウオーコーカーラ)

簡単な例文でありながら、英語であれ中国語であれ、これをカタカナで発音して実際に意味が通じることはまずありえない。学習者に発音してもらったときちゃんと発音できている人は意外と多くないのだ。個人差はあるが成人してから第二外国語を学ぶ場合は、ネイティブと同じような発音・イントネーションにまでなるのはなかなか難しい。しかし、少なくともネイティブの人が聞いて、理解できる最低限のレベルまでは到達しなければいけない。最低限のレベルまで達していない人は、今からでも遅くないので、自然にその発音ができるようになるまで継続して練習をすべきである。

初期段階での発音の基礎はやはりネイティブの講師に舌の動かし方や発声を習うのが手取り早い。特に英語の“th” “LとR”の違い、中国語の四声、“zh” “g ありとなし”などはこの段階で正しく覚えないと、その後何年も続く学習にもずっと影響するので要注意だ。とりあえず、下記の文を発音してネイティブがスクリプトなしで聞いて普通に理解できるまでは練習を重ねてほしい。()に示したのは日本人が混同しやすい別の単語であり、間違えると“重大な誤解”を引き起こすおそれがある。その重大さについては、ご自身で辞書を引いて確かめてほしい。



「語学ここだけの話」

(英語)

L&R We have a presidential **election** next year. (**erection**)
We eat **rice** everyday. (**lice**)
There are **rules** to abide by.

S&SH Do a hundred **sit-ups** now. (**shit** up)
The sun is **shining**.

TH I am **thinking** now. (**sinking** or **shinking**)

(中国語)

ZH 我是**中国**人。 wo3 shi4 zhong1guo2 ren2

HE 我**喝**醉了。 Wo3 he1 zui4 le-

上記は私が思いついたほんのいくつかの例にすぎないので、詳しくは専門教材を参照されたい。正しい発音はネイティブ講師のいる外国語教室などで習うのが王道ではあるが、実は私は中国語の発音は全く独学でマスターした。後にも触れるが、今の時代、インターネットの検索エンジンで“英語”、“中国語”、“発音”などと入力すれば、無料でネイティブ講師が口、舌の動かし方を丁寧に教えてくれるサイトがかなりの数ある。結局のところ、会話学校に行ってもインターネット上でもやることは同じなのだ。いや、再生ボタンを押せば何回でも嫌がらずに教えてくれる分、インターネットの方が優れているかもしれない。又、先生の映像付きの場合は大体の場合、女性は美人で男性ならイケメンの兄ちゃんだったりする。異論はあるかも知れないが、学習を継続する上で大切なのは、“楽しく、気持ちよく”であるから、あながち軽視できない要素であると思う。唯一の欠点は、ネット上では自分が正しく発音ができているかどうかをチェックしてくれる人がいないということである。自分で正しい発音ができているかの判断は、かなりの部分、センスによるところが大きいように思われる。確実にやりたいのであれば、ネット上で練習をした上で会話学校でネイティブチェックを受けるのがよいだろう。

但し、発音・イントネーションの練習ははっきり言って面白くない。工夫してもこればかりは面白くしようがないように思える。しかも、最初のうちは舌の動かし方が分かっても、それがぎこちなくて思うように動かないという現象がおこる。これは当然である。なぜなら、野球の素振り、空手の型、各種ダンス、等ほとんどの運動に共通するようにやったことのない動きは継続して反復練習をしな



「語学ここだけの話」

ければできるようにならないからだ。外国語の発音・イントネーションも全く同じである。だからこそ、それが自然にできるようになるまで反復練習が不可欠なのである。

全ての学習過程に共通することではあるが、発音・イントネーションのように、面白くないトレーニングこそ、それを継続させる仕組みを考える必要がある。私がお勧めするのは練習前の発音を録音しておいて、定期的にトレーニング後の自分の発音と比較することである。いわゆる**成長の”見える化”**である。具体的なやりかたとしては、1－2分程度のネイティブスピーカーが朗読する文章の教材を使用し、自分のトレーニング開始前の朗読をスマホに録音しておくのだ。トレーニング前の自分の録音分を日付をつけて保存しておく。発音トレーニングの効果は1日2日では現れにくい。継続して練習をして1ヵ月後に同じ教材の朗読を再度録音して聞き比べるのだ。そうすれば、以前のもものと聞き比べて自分がどれだけ上達しているかが分かるはずだ。この方法は後に説明するシャドーイングにも通じるやり方で、モチベーションを保つ意味でも非常に効果的である。語学の習得を決意されたあなたにはここでつまづいてほしくない。この面白くない過程を何とか乗り越えて次のステップへと進んでほしい。

外国語を外国語のまま理解すること

耳からの大量のリスニングは基本であるが、大体3回聞いても聞き取れないものは何回聞いてもわからない。『聞き取れない』という現象は、基本的に『その単語の存在を知らない』か『知っているけど発音が聞き取れない』のどちらかしかない。どちらにせよ、分からないものをずっと聞くのは苦痛だし、何回聞いても分からないものは分からないので殆ど無駄と言ってよい。よく音楽のように聞き流すことで『音に慣れる』というが、あれは疑わしい。モーツァルトのようなクラシック音楽であれば、“感性”で聞くから言葉が分からなくても十分鑑賞できるが、残念ながら言語は“感性”では理解できない。言語は基本的には論理を司る左脳で理解されているのだと思う。だから聞き流すことで『音に慣れる』ことがあったとしても、それは結局意味をなさない『雑音』であり、聞き続けることには相当の忍耐が要るはずだ。『聞くだけで分かるようになる～』という触れ込みの教材が、聞くだけではなかなか続かない理由はここにある。これらの教材はリスニングを重視しているという点ではよいと思うが、全てを『聞くだけ』で習得するのはそもそも無理があるのだ。試しにスワヒリ語を youtube で検索して一時間聞いてみると良い。おそらくは耐えられないはずだ。

私は英語も中国語も大量のリスニングをしているが、今でも分からない単語が多く出る題材を“答え合わせ”をしないまま何度も聞くことはしない。『知らない単語』を『使える単語』にするにはテキストを見て、何という単語でどういう意味であるかを最低限確認しなければいけない。その上でリスニングを繰り返すことにより初めて記憶が強化され、最終的に『使える単語』になるのである。リスニング教材の中には、英語や中国語の後に日本語訳が吹き込まれているものもある。これなら聞くだけで大丈夫と思われるかもしれないが、必ずしもそうではない。私が語学学習において一貫して主張するのは『**外国語を外国語のまま理解する**』という考えである。通訳や翻訳という作業

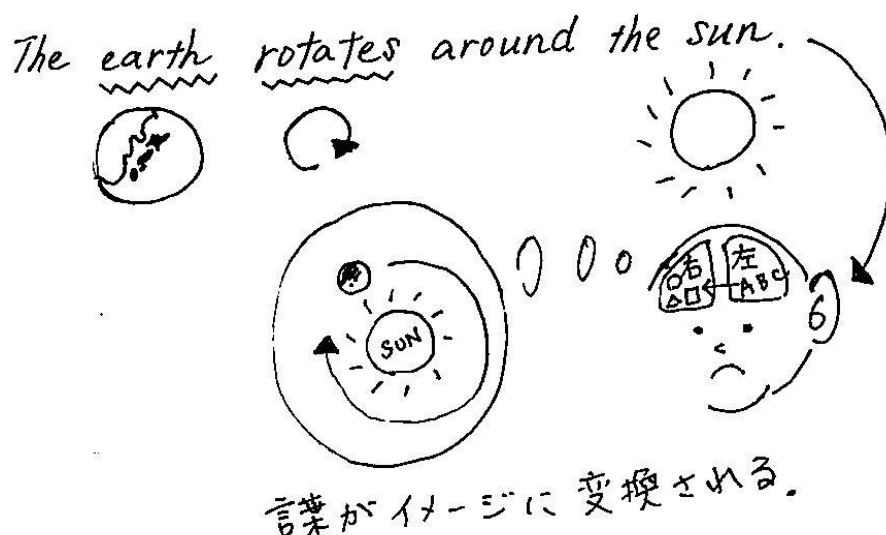


「語学ここだけの話」

は絶対に必要な場合を除いてはプロに任せるべきである。例えば、

The earth rotates around the sun. (地球は太陽の周りを回る)

という文を聞くと、あなたが earth (地球) と rotate (回る) という単語を知らなかったとする。正しいやり方は、まず、分からなくても何度か聞いてみることだ。何度か聞いても分からなければ、テキストをみる。そこで初めて『なるほど、earth か、rotate か』とその単語の存在を知る。次にあなたはこれらの意味を英和辞書で調べる。すると『earth = 地球』、『rotate = 回る、回す、etc』など色々な例文を読んでその大体的意味を理解する。そして、もう一度、同じ文章を聞く際、できれば日本語に『翻訳』せずに、頭の中が次のようになるのが理想である。



この時、耳から入った情報は日本語ではなく、あくまでイメージに変換されなくてはならない。これが英語を英語のまま理解することである。お分かり頂けたらだろうか？この考えは、習得する言語が何語でも同じである。同じ要領でどんどん単語を増やしていき、文を聞いてそれがそのまま頭でイメージできるようになるのが正しい学習結果である。これを正しく理解すれば、言葉というものが言葉で始まっているのではなく、手に取れない概念やイメージから発して、それが英語や日本語といった言語に分解されているということがお分かり頂けると思う。私たちは OS が日本語であれ、英語であれ、『イメージ⇒言葉』、『言葉⇒イメージ』を繰り返しながら意思の疎通をしている。英語や中国語を習得するということは、このイメージを変換するソフトを複数もつ、ということなのである。



「語学ここだけの話」

単語の覚え方

受験勉強をすでに経験された大学生以上の読者であれば、英単語を覚えるのに苦労した方は多いと思う。私も英語に関しては勉強熱心だったから、それこそ百個以上の単語帳を使って、表に英単語、裏に発音と例文、そして日本語の意味を書いて必死で覚えたのを記憶している。この方法は、“お受験”には絶大なる効果をもたらしてくれたため、私自身、否定はしたくないのであるが、実践的な語学学習という意味においては正しくなかったと言わざるを得ない。ここでは語学学習で決して避けて通ることのできない単語の覚え方について、いくつかの条件を挙げて説明したい。

基本1－3

1. 耳で覚えよう

そろそろ耳にタコができる頃だと思うが、単語は耳から覚えなさい。MP3 プレーヤーにネイティブスピーカーの発音の教材を入れて、常に持ち歩いて耳で聞いて、覚えるのです。“お受験”で大活躍した単語帳は、引き続き使ってください。但し、基本は耳から覚えて単語帳はあくまで塾の行きかけの電車の中で見るような補足資料として使うことをお勧めする（※スマホの単語アプリでもよいものがあるが、他のエンタメアプリの誘惑に負けぬよう自律心が必要だ）。

2. 口に出して覚えよう

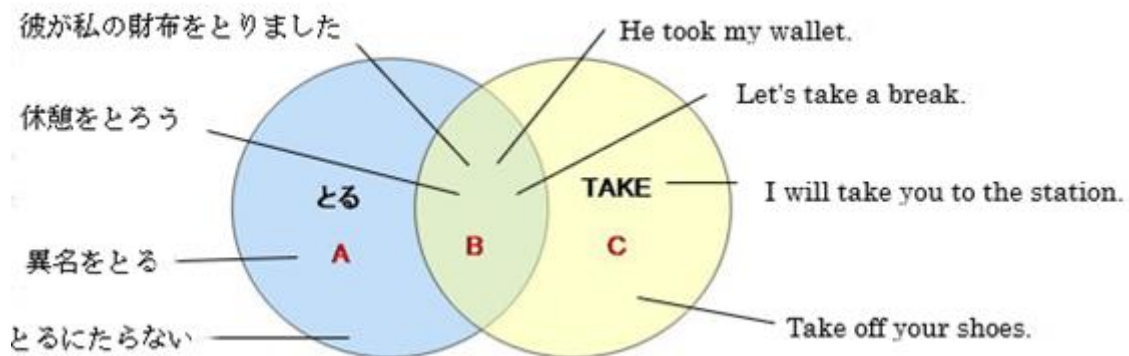
あなたはどうか知らないが、私たちの多くは実は聞くだけではモノが覚えられる程賢くない。耳で聞いたことは、口に出して発音したほうがよい。大体、私たち日本人は英語も中国語もどうしてもなく発音が下手だ。最初の段階で訓練が足りないのは明らかである。但し、こればかりはどこでもここでもやってたら変な目で見られるから、公共の害にならない程度でできるだけ頻繁にやろう。

3. 例文で覚えよう(Cゾーンを理解する)

Cゾーンの説明で理解頂いたと思うが、単語は必ずしも日本語ひとつに対して英語ひとつの対応語があるわけではない。もし、『いす』を“chair”と覚えるように全ての単語に夫々対応語が決まっているなら、外国語はただの記憶ゲームになるはずだ。何度も言うが言語とは非常にアナログであいまいでいい加減なものだ。言語同士の文化圏が離れば離れる程、全く同じ意味を持つ言葉は少なくなる。日本語にとっての英語はその最たるものの一つだと言える。例えば“take”という単語を覚えたいとする。あなたは辞書で引いてこれを『とる』と覚えてはいないだろうか。ダメだとは言わないが、それだけではあなたは“take”の意味の半分も理解していることにはならない。次に示す言語サークルので言うところのB部分だけである。



「語学ここだけの話」



“take”の意味を本当に理解するには、take を使った正しい例文をできるだけ多く何種類も耳で聞いて、『とる』を意識しないでずーっと頭に入るまで続けることである。

仮に私が今“take”を使った例文をいくつか書いてみよう。これをネイティブスピーカーに発音してもらい、録音したものを何度も聞けばよい。当然、それを自分で口に出して発音した方がよいのは前に説明したとおりだ。例文は多ければ多いほどよい。但し、正しい例文であることは必須条件だ。よほど自信がない限り自分で作ろうと考えないほうがよい。

I'll take you to the station. (私があなたを駅まで連れて行きましょう)

Take it easy, don't take it so seriously. (かるーく考えて、そんなに深刻に考えるなって)

Why don't we take a break? (ちょっと休憩にしよう)

Take off your shoes at the entrance. (玄関で靴を脱ぎなさい)

One hamburger, for take-out please. (ハンバーガーひとつ、テイクアウトで)

I'm gonna go take a piss, OK? (ちょっと俺、小便してくるわ)

*gonna = going to の口語形

最後の例文はあまり上品ではないが、中学、高校生の君は一気に脳がフル稼働したはずだ。このようにして例文を“印象”に残すことも一つのテクニックである。そして、最終的に“take”の意味を覚えたあなたは、それが必ずしも『とる』ではないことを実感として理解していなければいけない。

応用4-5

4. 認知スピードを上げる

単語や文章をリスニングから覚えることを説明したが、実はこの『覚えた』は実に曲者で、これが完全に自分のものになるにはいくつかのステップがある。先に例に出した“walk”をとって説明しよう。もし、あなたが“walk”を見て『歩く』と認識するけど、“walk”と聞いて、それが聞き取れなければ、



「語学ここだけの話」

あなたは学校の英語教育の重度の犠牲者である。“walk”はあまりにも簡単すぎるので、“rotate”（回る）という単語ではどうだろう。どちらにしても『見てわかるけど聞いてわからない』のであれば、あなたは根本的に覚え方を間違っているから、本書を読んで改善されたい。さて、あなたが正しい順序でこの“walk”や“rotate”を覚えたとしよう。あなたはネイティブスピーカーが実際に日常会話で使う“walk”や“rotate”が聞き取れるだろうか。



- I am walking down the street.
- The earth is rotating around the sun.

あなたのレベルにもよるが“walk”は何とか聞き取れても“rotate”は聞き取れない人が比較的多いかも知れない。何故だろうか？理由の最たるものはスピードである。あなたが頭でその単語が分かっていても、相手のしゃべるスピードが速すぎてついていけないのである。何故、“walk”は聞き取れて“rotate”は聞き取れないかというと、“walk”は基本中の基本単語であなたが今までに何度も何度も見たり聞いたりすることにより脳への浸透度が高まっているからである。“rotate”を同じだけ聞いていれば、当然聞き取れるはずだ。私が再三にわたりリスニングの量を強調するのは、**聞けば聞くほど脳への浸透度が高まり、その分、ネイティブスピードについていける認知スピードも高まるからである**。実は、大量に聞く以外に認知スピードを上げるとっておきの方法がある。通常の教材のスピードを1.5倍や2倍にして聞くことで意識的に認知スピードを鍛えるというやり方だ。昔は速聴機という特別な機械を使う必要があったが、現在はYoutubeなどでも簡単に再生速度を変えられる機能がついている。語学学習者にとって全く言い訳の余地のない環境にあると言っても過言ではない。

通常、語学教材の音声はネイティブスピーカーが学習者のためにゆっくりしゃべってくれている。このため、これらの教材スピードについていけても、実際の会話スピードではついていけないどこ



「語学ここだけの話」

ろか、聞き取りもできない場合が多い。日本でも皆が皆、NHK のアナウンサーのようにしゃべるわけではないことを考えれば納得いただけると思う。そこでこれらの教材を何度も聞いて聞き取れるようになったら、1.5 倍にして聞くのである。1.5 倍にして慣れたら、今度は 2 倍にして耳を鍛えていく。もちろん 3 倍、4 倍にして鍛えてもいいが、通常 2 倍にして普通に聞き取れば大体大丈夫だ。実はこの方法は、認知スピードを速めると同時に勉強時間を短縮できるという優れた方法である。中国語を独習していた 2008 年当時、私は中国語成語(四字熟語)の CD を 2 倍速にして Walkman に入れて聞いていた(まだスマホが普及しなかった)。300 程収録された四字熟語(成語という)は全て例文とともに収録されているため、非常に分かりやすい。私は通勤の電車内で、この成語を Walkman で聞き、2 ヶ月で全部覚えてしまった。一度覚えたものを 2 倍速にして聞いて認知スピードを上げて、記憶を定着させたから忘れにくいのである。仮に間違えてこれらを『見て』覚えようとしたらどうなるだろうか。日本人であれば中国の成語は読めば意味がわかるようなものが多い。300 覚えるのにも真剣にやれば、そんなに時間はかからないはずだ。しかし、実際、中国人がそれを発音するのを聞いても全く分からないはずだ。ましてや、自分で発音しても全く理解してもらえない。このような“かわいそうな”中国語学習者は日本にたくさんいる。英語でも中国語でも言語であれば正しいアプローチはどれも同じである。あなたが学習する言語を使えるコミュニケーションツールとしたいのであれば、理論をよく理解した上でご紹介した方法で耳と口を鍛えながら覚えてほしい。

5. 単語を覚える順序と量

単語は闇雲に覚えればいいわけではない。言語の 4 要素に覚える順序があるのと同様に、単語にもやはり覚える順序がある。語学教材や語学系出版物で有名なアルクの分析を参考にすると、覚えるべき有用な英単語は入門から最上級まで全て合わせて Level1～Level12 まで夫々 1000 語ずつで合計一万 2 千語程度あるそうだ。下記はアルクが有用英単語 12000 語をレベル別に振り分けた目安表である。



アルクによる必要単語分析

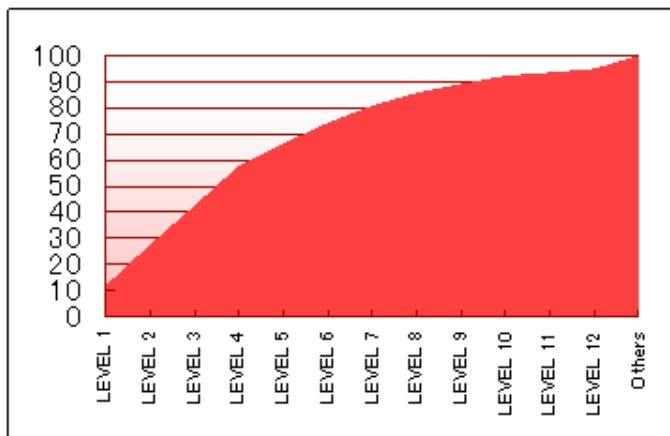
	レベル	単語数	程度	
入門	LEVEL 1	1000	英語の基礎をなす必須英語	} 使いこなすべき単語
初級	LEVEL 2	1000	日常生活で活躍する英単語	
	LEVEL 3	1000	楽しく会話がはずむ英単語	
	LEVEL 4	1000	読解の基礎を固める英単語	
中級	LEVEL 5	1000	大学受験前に覚える英単語	
	LEVEL 6	1000	検定試験に挑戦する英単語	
	LEVEL 7	1000	表現力を豊かにする英単語	
上級	LEVEL 8	1000	読解の自信を深める英単語	
	LEVEL 9	1000	TOEIC高得点を狙う英単語	
	LEVEL 10	1000	英文雑誌を楽しめる英単語	
最上級	LEVEL 11	1000	自分の視野を広める英単語	
	LEVEL 12	1000	世界をさらに広げる英単語	

このうち、最も重要なのはもちろん入門と初級である。これらは例えばアメリカであれば読み書きが苦手な子供でも知っており日常的に使っている単語やイディオムである。

私は闇雲に上級や最上級の単語を覚える前に、入門、初級までの単語を“使いこなせる”レベルにまで習熟度を上げることの方が先決だと思っている。何故なら入門や初級の単語はそれだけ使用頻度が高いから入門・初級なのであって、それ程に重要だということだからである。逆に言えばこれらの単語を使いこなす訓練をすればたとえ中級以上の単語を知らなくても最低限の意思を伝えることは可能はずだ。



「語学ここだけの話」



上記のグラフは同じくアルクが日常的に検索される単語がどの LEVEL に属するかをグラフに表したもののだが、入門＋初級である LEVEL4(累積 4000 語)までで 60%, 中級までの LEVEL7(累積 7000 語)で約 80%をカバーしていることが分かる。

しかし、多くの熱心な学習者の場合、入門・初級レベルの単語はほぼ100%知っているが、“使いこなす”レベルになっていない場合が多い。それは先ほども説明した“覚え方”が間違っているのが主な理由である。入門、基本レベルの単語や文章を耳で何度も聞き返し、同じことが自然に口から出るくらいまで訓練しないと脳にはインストールされない。結果、読めるけど聞き取れないという自然界の法則を無視した“最悪の現象”が起こるのである。これらの必須単語を使用した例文を4で説明した倍速で聞き続ければ比較的短期間でインストールすることができるだろう。もちろん語彙は多ければ多いほどよいので、入門・初級を使いこなしている前提で、どんどん活用語彙を増やせばよい。因みに私は今このアルクの最上級 Level12 の単語を見たが、知らない単語はまだ多くあるようだ。しかし、私はビジネスや CNN のニュースなども含めて英語で不自由することは殆どない。アルクが示すような専門会社が分析したものを参考にして、自分がどのレベルまでを習得するのか目標を立てて学習するとよい。

最強の先天セットトレーニング法:シャドーイング

基本文法、発音の仕方、最低限の単語を覚えたら、これらを組み合わせて自分の意思を伝える練習をしなければいけない。つまりアウトプット(スピーキング)の練習である。ここでもう一度、原点に戻ってほしい。インプット・アウトプットの法則だ。忘れていたら 2-1 に戻って読み直してほしい。この段階ではあなたの語彙力はまだ限られており文法もあやふやである。このままの状態であなただけがアウトプット(スピーキング)の練習をすると、間違いなく中途半端で間違いだらけの表現を正しくない発音で練習することになる。何故ならインプットが足りない状態でアウトプットを試みることになるからである。しかし、インプットが十分になるのを待っていたら、きりが無い。そこで、いわゆ



「語学ここだけの話」

る先天セットを両方同時に鍛える最強の方法を紹介しよう。シャドーイングである。もし、“ノーベル語学賞”というものがあるならシャドーイングという方法を発明した人にこそ贈られるべきだと思う。それほどに、この方法は確実な効果がある。シャドーイングは最近注目されてきたリスニング力とスピーキング力を同時に鍛える科学的な方法で、もともとはプロの通訳者などが訓練のためにするトレーニング法とのことであった。やり方は簡単でネイティブスピーカーが吹き込んだ音声を聞くと同時に同じことをしゃべるというものだ。影(シャドー)のように光を追いかけるからシャドーイングと言われるようになったのだろう。筆者が継続的に実践して実感するこの方法の優れている点を下記に挙げる。

1. 母国語が介在する余地がない
2. 発音やイントネーションの訓練になる。
3. 聞き取れていない単語は発音できないため、克服する弱点が明確になる。
4. 集中力を要するため必然的に効率が高まる。
5. 場所を選ばず、家事や軽い運動をしながらでもできる。

それぞれの特徴を解説しよう。

1. 母国語が介在する余地がない

シャドーイングはネイティブが話す言葉をインプットすると同時にアウトプットするため、母国語である日本語が介在する余地がない。必然的に外国語を外国語のまま理解するようになり、また、そのままアウトプットすることによりその外国語の思考回路が形成されやすくなるのだ。つまりはCゾーンの思考をCゾーンの思考のままインストールすることができる。

2. 発音やイントネーションの訓練になる

言うまでもないが、これは非常によい発音とイントネーションの訓練になる。発音ばかりに気をとられてイントネーションやアクセントがなおざりになっている学習者も多いが、シャドーイングはネイティブの言葉の流れをそのまま真似することにより、発音、イントネーションを含むスピーキング全体ができるようになる。

3. 聞き取れていない単語は発音できないため、克服する弱点が明確になる。

これは実践してみれば、すぐにわかると思うが、自分が知らない単語や聞き取れていない単語はシャドーイングができない。聞いた単語は脳がその意味を認知しているからこそ、再生できるのである。聞き取れなければ、その単語を別途覚えて十分に発音練習してからやれば、大体的場合次からできるようになる。教材の難易度にもよるが、シャドーイングがうまくできない場合、原因は次のいずれかである。



「語学ここだけの話」

1. 単語を知らない

⇒これは先に述べたとおり、調べて正しく発音できるように練習することで克服できる。

2. 知っている単語の文章だが舌がついていけない。



⇒これは練習不足、もしくはスピーカーの口述スピードが練習者のレベルに合っていないことが考えられる。集中して何とかついていける程度のスピードで練習を続け、段段にレベルを上げていけばよい。

4. 集中力を要するため必然的に効率が高まる。

聞いたものをそのまましゃべることはそもそも相当の集中力を要する。話者のスピードが上がればあがるほど、集中しないとできないため、必然的に学習効率は高まる。繰り返し練習しているうちに、脳で新しい回路が形成され、ほとんど無心状態でシャドーイングができるようになる。ただし、ここで注意したいのは、内容を“暗記”してしまい話者が話す前に話してしまわないことだ。それだとただの音読と変わらない。あくまで聞いたものを口にだすことによりリスニングとスピーキングを同時に鍛えることを意識されたい。

5. 場所を選ばず、家事や軽い運動をしながらでもできる。

これもシャドーイングのよい特徴だ。私の場合 Walkman を常に携えていたため、自転車にのりながら、家で皿を洗いながら、就寝時になど、様々な“スキマ”時間を利用して訓練した。科学的に証明はできないが、私は軽い運動をしながらこの練習をする方が、シャドーイングだけのために机について練習するよりも効果が高いように思える。やはりシャドーイングなどのスピーキング練習は勉強というよりは体を動かすスポーツに近い感覚だといえる。



「語学ここだけの話」

私は中学以降の英語の授業は発音と基本文法、基本単語を覚えた後の授業の半分はスマホなどのデジタルデバイスを持たせてシャドーイングを延々とさせるほうが、よっぽど実用的で効果的だと信じている。空手道場に通ったことのある人なら分かると思うが、空手の練習は通常最初の30分から1時間くらい、ずっと基本の型をやらされる。基本の正拳突きから、受け、蹴りというように毎回毎回何度となく正しいフォームで反復練習していくうちに体がそれを覚えていくのである。語学の学習者も同じように最低でも最初の10分から15分程度、基本リスニングと基本シャドーイングを続けるべきである。正しい指導者さえいれば確実に効果があり、中学高校6年間の英語学習が実践的に何の役にもたないという『ありえない事態』は避けられるはずだ。少なくともコミュニケーションツールとして英語を学びたいのであれば、私はスマホを肌身離さず持ち歩き、“仮想留学”することをお薦めする。やり方さえ間違わず、モチベーションを保つことさえできれば、少なくとも高校を卒業するころには日常会話はおろか、かなり高いレベルの会話も楽しめるようになっていくはずだ。

筆者のシャドーイング経験

ここで自身の経験が参考になると思うのでご紹介したい。私は語学としての英語の学習はだいぶ昔に一段落ついているが、Youtubeなどで海外の番組は継続して視聴している。そこでも当然質の高い英語のインプットするようにしているが、そのうち自分にとっての英語の先生を先述の故 Steve Jobs 氏とObama元大統領の二人と決めている。彼らはそれぞれアメリカ経済界、政界のトップというだけでなく、話者としてもアメリカで超一流だからである(Steve Jobs 氏は原書執筆中の2011年10月に死去)。彼らが行う数々のスピーチやプレゼンテーションをシャドーイングするのであるが、そのうち Steve Jobs が2005年にStanford Universityの卒業式で行った有名なスピーチが私のお気に入りである。

私は2007年のある時期から約2年間に渡り、毎朝4:00に起きると同時にこの15分程度のスピーチをシャドーイングし続けた。もう、かれこれ500回以上やっているのではないだろうか。初めころは知らない単語もいくつかあり、つかかることが多かったのを覚えている。毎日やるうちに知らなかった言葉も自分のものとなっていくのが分かった。そして、自身がそのスピーチの内容に共感するうちに、自分の感情をこめて言えるようになり、終にはスピーチの一字一句を暗誦してWalkmanなしでできるようになった。今ではスピーチの一語一語が脳裏に焼きつき、ことあるごとにJobs氏の“Stay Hungry, Stay Foolish (ハングリーであれ、お馬鹿のままであれ)”という声が脳裏で再生されるようになった。私はこのJobs氏のスピーチを日本語で考えたことはほとんどない。この有名な“Stay Hungry, Stay Foolish”という決め台詞にしても、言語サークルのCゾーンに属する表現であり、日本語にはできないのだから。しかし、間違いなくスピーチの内容は私の脳に完全にインストールされ、すでに精神的な支柱にさえなっている。ここまでくるとクリスチャンが毎週バイ



「語学ここだけの話」

ブルを読むのに近い感覚である。もちろん、一般学習者はここまでやる必要はないのだが、脳にインストールするというのはつまりはこういうことだと考えてよい。そこで、シャドーイングを続ける上でのいくつかの条件を挙げておきたい。

1. 良質の英語(中国語)であること(一流の語り手であることが望ましい)。
2. 自分が共感できる内容であること(そうでなければ、何度も聞く気になれない)。
3. 時間は長くとも 10 分以内のものにすること(でなければ、まとまった隙間時間ができないだろう)。
- 4.

もうひとつ大事なことは、その音声を常に MP3 プレーヤーに入れた状態で身から離さないことだ。朝起きてから、いちいちものを探して、スイッチを入れて、など面倒くさくていやになってしまうからだ。また、Jobs 氏のスピーチはレベルが高いので初級者、中級者がいきなりやると挫折してしまう可能性が高い。難易度の高くないものから徐々に慣らしていった、最終的に自分の好きな俳優や政治家、企業家などのスピーチやプレゼンをシャドーイングできるようになるとよい。



あとがき

同書は約10年前の2011年に書いた原書「本気で語学をモノにしたいあなたへ」を現代版に UPDATE したものである。初版当初は語学の学び方を第一章、二章にまとめ、後半は「留学のすすめ」、「国際人になるために」という題目で、語学をマスターしたあなたがどのようにして真の国際人になるべきかを説いた内容であった。

2007年当時、市販の中国語教材はまだ少ない中で、会社から命令されたわけでもなく、語学をやり始めるには決して若くもなかった32歳の私は、過去の英語習得からの教訓と仮説をもとにほぼ4年間毎日中国語学習を続けた。その間、平日は9時に寝て朝4時に起きて学習をする日が続いたが、当の本人は努力しているという感覚はあまりなかった。おそらく、はたから見ても努力をしている人のほとんどは、それが習慣化されており、周りが思うほど苦痛を感じながら歯を食いしばってやっている感覚はないのだろう。しかし、離陸した飛行機が当たり前に時速800km程度の高速で飛び続けるように、その習慣は確実に実力という結果をもたらしてくれた。今、英語と中国語を覚えた私はアメリカや中国をはじめ世界中の友人と頻繁に連絡を取りながら、この先、歴史がどう動いていくのかと、期待と不安の両方を胸に抱えながら我が国の行く末を眺めている。

最後に私が決して優秀ではないことを暴露するためにオチを付け加えておこう。中国語を習得して会社でいきなり中国顧客と電話で談笑をして周りの社員を驚かせた私ではあったが、会社という組織で求められる協調性とはどうにも折り合いがつかなかった。また、2011年に人生を集約して書き上げた本は、大手出版社とも契約を取り付けたのだが、肝心な家庭内の稟議承認を得ることができず、結果、同書は現在まで10年以上の間、お蔵入りとなったのである。この10数年の間に世の中は私が当時想像していたよりも速く「私が恐れていた世界」へと変わっていった。当時「失われた20年」と言われた日本は「失われた30年」となり、「アジアの中で唯一成長してない国」という有り難くないレッテルを張られるまでに落ちぶれてしまった。

そこで、私はもう一度、同書を世に送り出し、日本の再興を担う若者たちへ精一杯のエールを送りたいと強く思うに至った。同時に私は20数年のサラリーマン生活にピリオドを打ち、自らが代表となる EMW 語学研究所を設立し、残りの人生を「正しい語学」から開けていく素晴らしい世界をできるだけ多くの若者に届けることに捧げようと誓ったのである。

「ごがくゆうしん」はただのトライリンガルのおじさんではない。彼は語学というものを通して海外への文化の扉を開き、変容していく日本を憂いながら次世代の若者に「国際人」としての経験と技術を伝承する「語学の伝道師」なのである。一人でも多くの若者が組織に馴染めなかったこの「ごがくゆうしん」から語学の本質を学んで世界への扉を開いてほしいと願っている。最後まで読んでいただいたあなたに感謝するとともに、あなたが語学をマスターする100人中10人の一人になることを願ってやまない。Good Luck。加油吧。

2023年3月31日



あなたの**語学力**は

確実に**伸びる**

日本人、どうかしてるやろ？

語学は正しい順序と方法と継続だけやで。

有料級の『語学ウェビナー』を
無料で開催します。本気の方のみ
LINEにご登録ください。



語学の伝道師

ごがくゆうしん

従来の語学を根底から覆す

EMW語学研究所

